

学びの風便り

リーディングスクール通信67 R8.10.8(水)



発行：松本市教育委員会 教育研修センター

学びの改革のあゆみ 並柳小学校・開明小学校

並柳小学校～子どもも大人も「やってみたい！」でつながる学校づくり

並柳小学校では本年度、『やってみたい！』を大切に共にチャレンジしよう！～探究的な学びを通して、表現し合う子ども～というテーマを掲げ、研究・研修に取り組まれています。この半年間、先生方がどのような思いで対話を重ね、学校づくりや授業実践へ繋げてこられたのか、その歩みをご紹介します。

「対話の量」が育む安心感と、前向きなチャレンジ（4月～5月）

4月のスタート以降、月1～2回設定されている研究部の時間を大切に、みんなで同じ会場に集まってチェックインや対話を重ねてきました。この定期的な集まりを通してコミュニケーションの「量」が確保され、素直な気持ちを伝え合える「安心感」が醸成されていきました。先生方の「やってみたい」という挑戦を全職員の温かみで支える雰囲気生まれ、「やらされる研修」から「やってみたい研修」へと先生方の前向きな気持ちから、研究主任の鈴木先生は元気と発見をもらっていると語ります。



未完成の「余白」を歓迎し、知恵を響き合わせる（6月～7月）

6月には、気楽にメモ感覚で書ける「あのね設計シート」の活用や、アイデアを出し合う「チューニング」といった活動をしてきました。完璧な計画を作るのではなく、大人の「葛藤や迷い」を出し合い、対話を通してストーリー（単元構想）を作ってきました。7月15日の「東部ブロック公開」では、「特別な晴れ舞台」ではなく「日常の地続きの姿」を見せることを大切に授業公開がされました。授業後に授業者自身が輪に入らず参加者の声を聴く「聴き耳スタイル」のリフレクションを行うことで、「粗探しではなく宝探し」の温かな言葉のやりとりがありました。また、「1学年の運動会の玉入れを軸にした教科横断的な学び」など、チューニングで生まれてきたアイデアが実際の授業へと広がり、校内研修の「1人1公開」も着実に進んでいます。



研修が「学校づくり」へ直結する面白さ（8月～9月）

8月の「サマーセミナー」では、全教職員で「これからの並柳小学校」について話し合い、「余白の時間」を生み出す工夫などが話されました。その内容は単なる話し合いにとどまらず、実際の「校内プロジェクト」として立ち上がり動き始めています。研修が学校づくりに直接つながる面白さを実感しながら、互いの実践に関心を持ち見守り合う文化が根付いてきています。

ともに歩むこれからに向けて

大人たちの「やってみたい！」という生き生きとした姿は、子どもたちが「やってみたい！」と素直に思いを表現する学びの姿へと確実に連動しています。学校目標である「行きも帰りも笑顔」の実現に向け、大人も子どもも安心して「自分で問いを立てられる」学校を目指し、日々悩みながらも一歩ずつ前進されている並柳小学校です。

子どもの「やりたい！」が、学校を動かすー 開明小学校「かいめいタイム」の挑戦 ー

開明小学校では、学校目標「みんなが幸せな学校『学び』を楽しむ子ども」の実現に向けて、「いってみよう・きいてみよう・やってみよう」を合言葉に、子どもも先生も学び続ける学校づくりを進めています。

これまで、先生一人ひとりが自分の「問い」を持ち、仲間と語り合いながら授業づくりを考える「たい焼きタイム」を軸に、対話を大切にされた校内研修を積み重ねてきました。

そして今年度、その歩みの先に新たな挑戦が始まりました。それが「かいめいタイム」です。

25 分の「余白」に、子どもの願いを

「かいめいタイム」は、子ども個人や学級が、自分たちの「やりたいこと」に存分に挑戦する時間です。

40 分授業を取り入れることで、月・火・木・金曜日に 25 分間の「余白」を生み出し、9 月には 2 週間にわたって試行しました。そこで行われたことは実にさまざまです。個人で取り組む探究、生活科や総合的な学習の続き、学級をよりよくするための係活動、自主学習など。「何をするか」を教師が一律に決めるのではなく、子どもたち自身の願いから活動が始まっていました。

ある学級では、「何をやりたい？」という問いかけに、子どもたちからこれまで総合で取り組んできた活動がすぐに挙がりました。別の場面では「自主勉をやってみたい」という声や、「もっとよいクラスにしたいから係について話し合いたい」という声も生まれました。教師が用意した活動をこなすのではなく、子どもたち自身が「これをやってみたい」と言葉にし、相談しながら動き始めています。



まず、先生たちがとことん話し合う

この取組は、突然始まったものではありません。企画についての構想は年度末からあり、基本案も出されていましたが、「どんな子どもを育てたいのか」「この時間を何のためにつくるのか」という問いが職員の中から出てきました。そこで、夏休み明けより、研修の時間を確保し、制度や方法を学ぶだけでなく、「それを使って、どんな時間をつくりたいか」「自分たちの学年なら何ができそうか」を先生同士で考えてきました。そのプロセスにも、開明小学校が大切にしてきた校内研修の文化が表れています。

「裸にされる」からこそ、見えてきたもの

「かいめいタイム」は、子どもたちにとって楽しい時間である一方、先生たちにとっては決して簡単な時間ではありませんでした。担当の先生は、この 2 週間を「私たちが裸にされるような時間だった」と振り返ります。教師が段取りを決め、子どもを動かす授業であれば見えにくかったものが、子どもに委ねることで一気に見えてきたからです。「子どもの願いから学びを立ち上げてきたかどうか、そのまま表れる」。そうした経験が、先生たち自身の「子ども観」や「学び観」を揺さぶりました。

その結果、職員室でも、「この子は何をやりたいか」「子どもはどんなふうに学んでいるのだろう」と、これまで以上に“子どもを主語に”先生方が語り合う場面が増えてきたそうです。

子どもの「またやりたい」が、次の挑戦へ

9 月の試行は、子どもたちから大好評でした。「今日で終わり」と聞くと「えー！」という声があがり、振り返りや日記にも「またやりたい」という言葉が多く残されました。

一方で、先生たちは、このまま同じ形を続ければよいとは思っていません。「この時間を通して、どんな子どもの姿を目指すのか」「どんな力を育てたいのか」を改めて問い直し、11 月の次の試行に向けた作戦会議を始めています。

開明小学校の「かいめいタイム」は、子どもを信じて任せてみることを通して、教師自身の学び方や、学校の在り方そのものを問い直す挑戦です。

「いってみよう・きいてみよう・やってみよう」

この合言葉を、開明小学校では、今まさに子どもと大人が一緒に実践しています。



先生方の振返りの記録